



道南の自然と保護問題

宗 像 英 雄

渡島半島は、その背陵として第三紀に属する渡島山脈がほぼ南北に走って松前半島の南端におよび、また亀田山脈が大沼附近から分岐し、亀田半島の背陵となって東に走り、東端の活火山恵山におわっている。

主峰はいずれも千メートル前後で、他は一般に丘陵性で低い。しかし、独立峰、岩峰、熔岩台地、平原、深い侵蝕谷、新旧火山など、きわめて変化に富んでいる。

河川湖沼も大小さまざまな姿でその間に介在、または点在していて一段と変化を与え、海岸線もまた外洋、内海、内湾などの各種タイプをみせ、海流も対馬暖流が西岸を洗い、東岸は太平洋の影響下にあり、津軽海峡には寒暖の両流が交錯して流入、潮境をつくっている。このように、変化に富んだ地形が国定公園大沼駒ヶ岳をはじめ随

所に美しい景観をつくりだしているが、それはまた生物に対してさまざまな棲息環境を提供していることになる。したがって、当地域の生物相はきわめて豊かである。

生物地理学的には、北海道全体が本州系からシベリヤ大陸系への移行地帯であることが概観されているが、津軽海峡を境として黒松内低地帯、石狩低地帯と北上するにつれて本州系の密度が低くなっていく。つまり、道南は本州系のもっとも濃厚に分布しているところで、北上とともに稀薄になるが、とくに植物においてはその漸移傾向がきわめて顕著にうかがわれる。

したがって、この地域をもって北方系、寒地要素の分布の南限とするもの、本州系の北限とするものも数多くみられ、またその昔、和人の進出に伴って自然に、あるい

は意図的に移入された生物が、この地にとどまっているものもあり、さらに全道的に分布を拡大していったものもあるなど、生物地理のうえからも、生態的にも興味ある貴重な研究資料の豊富な地域といえることができる。

しかしながら、早くから和人の開拓がはじまった地域であるだけに、原始の状態は山岳地帯の一部に限られ、さらに戦時中の無差別な伐採、戦後の機械力による急激な破壊、農業の過度な使用などによって、あるものは死滅し、あるものは移動し去って、生物相は年を追って貧困化し、現在もなお変動をつづけている。最近の高度経済成長の名による環境破壊と、イナゴの爆発的異常発生を思わせる狂的な観光ブームのもたらす緑地の破壊が、日本の各地で問題を惹

起している。当地域もその例外ではなく、続出する事態に対処する暇のないほどである。

つぎに、その主なものの概略を紹介したい。

① 函館山観光周遊道路

南北海道自然保護協会は有志三〇名ほどが集まって、昭和四十六年八月六日設立総会を開催、北海道自然保護協会から井手理事長が来賓としてご出席、ご祝詞とご激励のご挨拶をいただいで勇躍発足した。

早速、とり組んだ問題が函館山周遊道路である。もともと、この車道については当協会結成以前から有志が憂慮して検討していたところのものであり、また、井手先生、辻井先生のご視察やご助言をおねがしいした

り、北海道自然保護協会の名で函館市に要望書を出していただいたりしていた問題であるが、当協会は発足からこの問題をかかえていただけに、組織づくりと対策が平行して進められ、スタッフは大変な苦勞であった。

函館山は津軽海峡に突き出た標高三三四メートル、周囲約一〇キロの丘陵で、山体の開析状態から洪積世初期の火山活動によって生じたものと考えられており、小さな山ながら意外に多岐にわたる環境要素もっている。そのうえ、明治三十一年から半世紀にわたって軍の要塞地帯として嚴重に立ち入りが禁止され、人為的に自然状態が保護されてきた。したがって貴重な植物群や野鳥が豊富で、このような自然が都会に隣接して今日存在するということは他に例のないまったく稀有なことで、保護地帯として保護するにじゅうぶんな価値をもったところといえる。

またこの山は、函館市および周辺に対して扇の要のような位置にあつてどこからでも眺められ、四季おりおりのたたずまいは古くから人々の心の中に生き、人々の生活の営みの中に深く根をおろしている、いわば、象徴的存在になっている。

函館市はこの山に、昭和二十年の中頃から観光道路の工事ははじめた。失対事業

であつただけに工事ははなはだしく杜撰で、二〇年後の今日、法面、路肩などいまだに未完成、雨ごとに泥を流し、植生を破壊しつづけている。着工当時、私どもは関係方面に注意を呼びかけたが、当時の社会情勢として自然保護的発言など一顧もされなかつた。植物愛好グループの我田引水的な感傷としか、みえなかつたのだろう。この車道はその後、一応観光バスの運行がはじまり、山頂からの眺望の素晴らしさ、ことに夜景は百万ドルなどと宣伝されるにいたつたが、その陰では、ふたたび得られない貴重な生物の滅亡という、嚴肅なドラマがくり返えされていたのだ。

近年になつてこの車道は、頂上の御殿山からさらに延長され、尾根筋を大きく削りとつて亜高山帯に属する植物群を全滅させて、立待岬を見下す千疊敷へと到達してしまつた。しかも、かつてより一段と乱暴な工事で、大量の岩石と土砂を海峽に面する二本の谷へ投棄してしまつた。落とされた大量の倒木と岩石が谷底に積み重なつて、見るも無惨な姿を呈している。市の理事者は、この惨状をも観光客に見せようというのであろうか。観光道路建設者として不適合者であることを、自ら証明しているものと断ぜざるを得ない。

五月、さらにこの車道は千疊敷北東斜面

の、この山としてはもっとも豊かに茂つた森林地帯を切り開いて立待岬に下降する予定線のあること、しかもヘヤビン道路であること、すでに青写真もでき、道路に昇格、予算もついた、ということを知られて驚いた。小さな山であるだけに、道路ができるときには観光の質的内容である、貴重な自然が失われてしまうことは明瞭である。従来の観光のあり方にすでに方向転換のきざしが見えてきた今日、市や道はどこまで無神経なのだろうか。私ども市民は後世の批判にたえなければならぬ。

このことが当協会の結成を促進させた。ただちに、森林地帯の破壊をさげ、路線を変更するよう陳情文をつくり、資料を添えて市長と道知事に提出した。なんの回答も得られないまま署名運動を開始し、街頭にも進出した。この問題の内容については何も知らされていなかった市民にも、ようやく理解者がふえはじめ、激励の電話や手紙が殺到し、署名も八千を越えた。会員も発足当時の三〇名が、短期間に八〇名を越えるにいたつた。昭和二十年代とは大きく変化している客観情勢に驚きもし、嬉しくも思つた。

十一月下旬、市から予定線の変更案を示されたが理事会で検討の結果、その森林が破壊されることには変わりのない案なの

で、ただちに反対の回答をした。それと同時に、「函館山の保全と管理利用に関する意見書」なるものをまとめ、当協会の構想を市長へ提出した。目下、理事会を中心に今後の対策を検討中である。

この山は全山が特別鳥獣保護区に指定されておられ、車道予定線に当たると北東斜面の森林は、この山の最後に残されたもつとも階層の豊かな森林で、固有種ナガバウシダキノウ、ハリトウゲシバなどをはじめエンレイソウ属、エビネ属などの小群落を点在させている地域であり、また野鳥にとつても年間を通じて五〇余種がみられる楽園でもある。

② 国定公園大沼

大沼公園は大正六年、林学博士本多静六氏の設計指導により、自然のままを基調とした公園として完成した。活火山の男性的逞しさと、湖水のもつ女性的優美さのよく調和した景勝地として広く世に知られ、昭和三十三年、国定公園の指定を受けた。大沼、小沼、葦葉沼の三湖と駒ガ岳およびその周辺をふくんでいる。ところが三年ほど前から、明鏡・大沼の水質汚染が問題になりはじめた。公園広場の施設からの排水、皮革なめし工場からの廃液などである。

最近の道工業試験場や函館市衛生試験所

などの調査によると、湖畔近くには異臭を放つ無酸素のところや、総クロムが基準の三〇倍というところもある、と報ぜられている。遊覧船の油が湖面に被膜をつくる、モーターボートが激しい高波を岸辺にたたきつけて、狭い入江の苔むした岸辺が崩れる、入江を静かに飾っているヒツジグサやコウホネがもみくちゃにされる、死魚の漂着がしばしばみられるといった問題まで起きはじめている。ワカサギとフナの宝庫といわれているだけに、ことは重大である。

もう一つ心配なのは、駒ガ岳山麓（湖北岸）の広大な分譲別荘地の造成で、近い将来、景観を傷つけることは必至だが、当面、排水や汚物処理を問題視しなければならぬだろう。浄化装置があっても、有機物の流入を完全に防ぎうるものではない。有機物は水中で分解され、水中酸素を消費する。有機物が多量になったり、水面が油でおおわれると酸素の補給が追いつかない。分解された有機物はリン酸塩、硝酸塩、アンモニアなどを放出し、これが植物プランクトンの異常発生の因となり、湖水は一層汚濁していく。

浅い湖なので汚染はある日突然一挙に全湖水に波及し、湖水は死んでいた、ということになりかねない。その汚水が折戸川を流れて、鹿部海岸のコンブ礁に影響するこ

とは考えられる。自然保護に過保護はない。湖沼や河川、海を廃物の捨てどころと思っていた昔の考えを、徹底的に払拭しなければ効果は望めない。

③横津岳スカイライン

亀田山脈の最高峰・横津岳（一、一六七m）は横津岳熔岩の高まりを中心とした古い熔岩台地で、頂上からの展望は素晴らしい。東の袴腰岳との間に本道最南端の高層湿原を幾つか持ち、尾根筋一帯は高山性植物群におおわれている。山腹には豊かな森林が展がり、とくに北側は大千軒岳山脈に匹敵する原始性を保っている。

国道五号線大中山駅からの登山道を拡張し、一〇キロほど登った山腹の大川牧場附近に、東海不動産がゴルフ場を建設した。牧場地なので、今後の利用に注意をすれば問題はなさそうに思われるが、ゴルフ場から前横津と横津の頂上近くまで建設中のスキーリフト三基に懸念がある。夏季のリフト運行によって大勢の人々が、簡単に尾根の高山植物地帯に踏みこむことができる。リフト上部に建設予定の避難小屋と称しているハウスの利用のしかた、とくに水を何処に求めるか、高層湿原の水位に影響がでるのではないかな。

また、延長を予定されている横津岳横断

道路が北側斜面のどこを通るか、数少ない原生林の破壊につながらないか。道林務部、七飯町、業者など関係者に対して慎重な検討を望むところである。

④国道五号線アカマツ並木

亀田市、七飯町の国道五号線沿いに一三キロにわたって立ち並ぶ約一、七〇〇本のアカマツ並木は、日本最北限のもので、いまでは本州にもあまり例のないみごとな並木として、土地の人よりも旅からの人々が「日本の昔をここに見た」と感嘆している。

最初のもは文久年間に植えたといわれているが、五〇年以上百年未満のものが半ばを越え、老令に加えて国道の舗装工事で内側の根を切られ、水道工事で外側の根が断ち切られたところもあり、宅地の急増で水質が悪くなったり、そのうえ害虫の発生という悪条件が重なって、近年とみに衰弱が目立ってきた。

さらに困ったことに、北電の高圧線と電話線が樹上を走り、部分的には梢の間を縫っている。台風で老木が倒れて、高圧線や電話線を切断したらどうなるか。国道の付属物として開発局が維持管理に当たっているが、枯死したあとに補植などして苦慮しているようである。アカマツ並木は、いかなる大金をもってしても移植は不可能なの

で、完全保護の立場に立てば国道と高圧線、電話線を移転させるがよい、ということになる。しかし実際問題として容易なことではないので、関係各方面の人々が「鳩首協議」を重ねてきた。

最近、道林業試験場道南分場長・増田憲二郎氏の貴重な基礎調査により、アカマツの病状、排気ガスや水質環境との関係などが解明されたという報道があった。これによって、先の「鳩首協議」も具体的に方向づけられるものと、一条の光明を得た感がある。

以上四点について略記したが、現在、当協会各専門部のスタッフが、道南一円の予想される問題点についてリストアップの作業を進めている。

（南北海道自然保護協会）